



新潟県胎内市 兼田秀樹

事例のポイント・要約

- 脱サラをして将来の夢を安全で安心して食べられる農業者を目指し研究・観察しながら若者の行える農業にチャレンジしている
- ボカシとEM（有用微生物）を主に活用して土づくりを行う

1. はじめに

新潟県胎内市で自然農法に取り組む兼田秀樹さんは39歳の時脱サラし、専業農家として自然農法に取り組み始めた。

現在は（財）自然農法国際研究開発センターの有機JAS認定農地468aを自然農法で栽培し、中条自然農法研究会の生産行程管理責任者としてグループの取りまとめ役を担っている。

2. 経営の概況

水稲栽培面積688aの内468aを有機JAS認定を受けている

3. 栽培圃場の概要

1) 圃場の立地と周囲の地形

胎内市は平野部の中条地区と、山間部の黒川地区の間に楕円山脈があり、それを横切る形で胎内川が流れている。典型的な扇状地である。市内を国道7号、113号、345号の3本の国道が整備され、日本海東北自動車道の中条インターが開通している。兼田さんの自宅とほ場は中条インターの近くにあり海拔9mの平野部である。

2) 栽培条件

水利はパイプラインが完備されており給排水が分離した成形ほ場で整備されている。

3) 圃場の課題と育土の方向

有機を始めた当初は堆肥系の資材を秋に施用していたが、現在は稲藁の全量鋤込みだけで土づくりを行っている。土が慣行に比べて保湿性が向上したよ



圃場周囲の様子

うに思われる。ど壤が変わってきた感じがする。

4. 具体的な栽培技術

1) 耕起～作付けの準備

春には市販の有機肥料を 75kg/10a 元肥に施用しているのみで追肥や穂肥は一切施用していない。

植え付け後にEMの流し込みを数回行っている。

2) 播種・育苗～定植

コシヒカリの自家採種の仕方等

有機JAS米については従来のコシヒカリを手刈りしはさがけ乾燥で自家採種を行い使用している

3) 播種・定植後の初期の管理育苗に使用する床土は赤土に市販の有機肥料を 50g/1箱を目安に攪拌し1週間以内に播種を行う。1週間以内に播種しプールに移動し水に浸すことにより床土の再発酵を予防することが可能になる。

種籾は塩水選後にEM1号に8時間つけてから0℃の雪水に20日間浸けその後15℃で7日間浸漬し最後に28℃で催芽を行う。

育苗機は使用せずハウス内でプール育苗を行う。大体2葉目あたりからEM1号の希釈液の散布とプールの水位が下がった分だけ水とEM1号を追加する。田植えは家族が揃いやすい連休等に行う。植え付けは50株/坪で行っている。

4) 雑草対策

5) 中間～後期の管理

6) 病虫害の管理と対策

病虫害については耕種的防除が主で9月20日以降の籾が黄化したのを確認して畦畔の除草を行うようにしている。

木酢液を数回予防的に散布している。木酢液散布のために動力噴霧機のホースを特注の130mの物を使用しほ場の中も30m毎に通路を設けて作業効率を上げている。畦には芝生を植えて他の雑草抑制を行い管理を楽にしている。家族や消費者に満足していただけるお米を栽培し喜んでいただける農家が本当の農家だと考えている。



芝を植えて畦管理を行っている

流通業者（デパート・百貨店・米屋）がほ場にきて畦端で話し合える関係の中で栽培し流通業者が消費者に安心して自信をもって届けて頂く流通ができつつありさらに充実していくように取り組んでいく。

5 . 今後の課題や取り組みたいこと

有機栽培に取り組んで8年、子供達が親父の栽培したお米は美味しいと評価してくれ、市販のものは安心して食べられないと言ってくれる。

地元の中条自然農法研究会生産行程管理責任者として有機JASの代表者になったが、転換期間中の時は販売に苦勞をした。継続して取り組んで行く内に関係業者から評価され業者がほ場視察に訪れるて下さるようになり、良い会話の連鎖が生まれきた。消費者の喜びが家族の喜びとして食卓の日常会話に話が弾むようになってきた。農作業も子供や家族とともに行うことが自然な教育の一環と思っており、家族が喜んで協力し、農作業に従事してくれるのがなによりの喜びで不満が出ない幸せを感じている。栽培者が全て自己責任で行える職業であり喜ばば喜び事が返ってくることを実感している。



有機JAS認定仲間と

くじけそうになるときもあるにはあるが、家族や消費者、業者が私どもの栽培したお米を待っていると思うと気持ちが前向きになり乗り越えられる。

そのためにも消費者の期待により応えられるように日々の取り組みが大切と思っている。自農センターのアドバイスを受けながら育土に取り組み、高品質でさらに収量の向上に努めて行きたいと熱く語ってくれた。

自然農法技術交流会より抜粋引用